

陽の里

発行 平成12年7月1日



社会福祉法人 新生会
総合ケアセンター

サンビレッジ

No.71

2000年 **テーマ** 第三回 介護の質の向上を目指して(ボランティア)



奉仕させていただけの喜びをともに

ガールスカウト岐阜県8団 国枝 一枝

新緑のまぶしい光の中で、ブラウニーがさつま芋の苗を植えています。

「秋には大きなお芋になってね。」

「今年もまた、サンビレッジのおじいさん、おばあさんに『さつま芋のお菓子』を作って持っていきたいからね。」

かわいい小さな手が苗に話しかけながら、一本一本丁寧に植えました。

秋!!十月の晴れた空の下でさつま芋の収穫祭です。

大きなお芋、小さなお芋、命あるすばらしい自然に感謝し、勤労の尊さを体験するひとときです。

ただただお芋の命のおいしさを、できるだけ多くの人々と共にお味わいさせていただきましょう。

そういう思いからスカウトたちが考えたのが、サンビレッジのおじいさん、おばあさんに、さつま芋でお菓子を作り、訪問させていただくことでした。

また、その折におじいさん、おばあさんと一緒に遊んだり、お話をしたり、肩たたきをさせていただいたり、得がたい心の交流と体験させていただいております。

発団以来十年、この訪問はスカウトたちの大切な奉仕と喜びの場として続けられてきました。地域と国と世界への責任を果たし、人に役立つことを心掛けているガールスカウトにとって、サンビレッジのお年寄りとの交流は大切な宝物です。

第三回「介護の質の向上を目指して」

ボランティア

社会を創る

ボランティア活動

施設長 太田 澄子

脳梗塞のため半身不随で言語障害、自宅では寝たきりの状態のため、精神的な活動もなく、生活のすべてに介助が必要だった女性がおられた。何の表情もない彼女に、職員はベッド上での生活が続くままますます体が硬くなり、苦痛を増すことが予想されたので、着替えをして、彼女自身気のない離床を少しずつ進めていった。一方家族に生活歴などを尋ねて、離床の目的を「家族同伴で大好きだったショッピングに行こう」と決め、少しでも体力を向上するよう、離床時間を設定していった。そんな彼女が日に日に表情が良くなり、離床を楽し

現場からのメッセージ

むようになつた。その原因は、毎日訪れる同室の利用者の家族との関わりであった。お母さんの食事介助に毎朝毎晩来苑し、お部屋の皆に「おはよう」「今晚は」と挨拶され、一時間ほどおられ帰宅される。その短い時間、その部屋には新鮮な地域社会の風が舞い、その風に彼女の心が潤い、今日だけではない明日への期待に彼女自身のやる気が出、体力機能が回復し、車椅子に乗ることができ、とうとう娘さんとショッピングセンターまでの買い物を実現し、デイセンターの仲間と一日を過ごすことが可能になつたという事例がある。

人生の終焉で大きな病気にかかり、思ってもみない障害を抱えることになつた多くの高齢者がホームの住

人である。気持ちに沈み、やる気も失せ、何も受け容れられない高齢障害者が、彼女のように今まで同様「普通」に暮らせるようになるには、その障害をカバーする車椅子のような自助具、マヒした右手の替りに生活を援助する介護職員、そしてホームを居場所として生活を送ろうとする本人の決意が必要である。その自己決定は、地域にある社会をこのホーム内にも創ることや、それを求めて玄関から外に出て、お店や公園、公民館や小学校、郵便局や図書館など地域社会に出掛け、人に会い、自然の日差しに触れ、

懐かしい香りに出会うことで可能になる。そうすることでその中に在った過去の日々を思い出し、その人生の継続をこのホームで送ろうという「生活を創る力」となる。全国から来られる見学者が、住人の皆さんの表情がよいと言われる。これも介護する側、される側の関係が、では築けない社会関係が、幼稚園児から老人までの多数のボランティアの力によって、このサンビレッジに創られているからだろう。ボランティアの皆様のご協力に住人と共に心より感謝を申し上げたいと思う。

ホームの暮らしが住みやすいと感じられる「生活の質」とは、何で見る事ができるのでしょうか。建物のように見える所はよく分かりますが、「介護の質」のように見えにくい所もあります。今回はボランティアと題して、日頃から利用者の生活を支えて頂いている活動の中から紹介させていただきました。生活の質を支える一つの柱が、ボランティアの活動であると考えています。優しい地域社会を構築するために、活動の輪が今以上に広がることを願っています。

つなぎ寝巻きを脱いで、自分らしい生活を

ヘルパー 高木美和

福祉施設においての生活の主体者は利用者であるが、現在多くの理由からやむを得ず痴呆性老人が抑制されている場面に出会う。我々は24年間という歴史の中で、痴呆性老人に対してつなぎ服を着せなくても、その人がその人らしく生活できる方法を検討、20年来実践してきた。

N氏（81歳）は、当施設に入所時、便や尿で汚れたおむつを外すからと、つなぎ服を着用していた。我々はN氏本来の生活を取り戻すべく、つなぎ服を洋服と交換するという第一歩からN氏に対するケアが始まった。まず排尿間隔を知る為に、1日の排泄をチェックすることから始めた。7月中旬、日中は紙おむつを使用しながら、排泄介助時、おむつ内

に排尿がなければポータブルトイレにて排尿を促した。夜間はおむつを使用し、排尿後さっぱりする為、排泄介助を1回増やした。7月下旬頃には少しずつ尿意が戻り、時に自分から尿意を訴えるようになった。こまめな声掛けと排泄介助回数を増やすことで、8月上旬には日中ほぼトイレでの自力排尿が可能となった。夜間もおむつ内での排尿は減少し、やがて自分でポータブルトイレに座ることができるようになった。夜間、トイレの場所が分からず、ベッドの上に排尿することもあった。本人が尿意を感じていても、職員が関われなかつた為に本人に不快を与えてしまったこともあった。また、この頃自力排泄後、上手くおむつを当てれずに

シーツを汚す行為が増えた為、紙パンツに変更し、定時の声掛けによる、ポータブルトイレでの排尿を促した。そして9月上旬には、昼夜とも尿意が戻り、排泄での直接介助は不要となり現在も終日パンツを使用している。尿意が戻り、本人の笑顔も多く見られるようになった。つなぎ服とはおむつを当てることによる腹部等の圧迫や、排尿後の不快感等からおむつを外したり、排泄物を弄んだり、また皮膚にかぶれや傷があり手でかいたりすることによる悪化を防ぐ為に用いられている。つなぎ服の中には鍵がついているものやカラフルな色を施した物など様々なタイプの物があり、それらは他の介護用品と同じように店頭に並んだり、本に掲載されている。つなぎ服を着ていればおむつを外すこともなく、それによる不潔行為も起きないが、つなぎ服を

着用する前に対象者の行動の意味を考える必要がある。今回N氏と関わった事で、つなぎ服を着用することが行動を抑制するだけでなく、生活意欲も衰えてしまうのだと感じた。N氏に笑顔が戻った背景には排泄介助を含め、本人に生活を視点にした様々な角度から関わりや統一した働きかけなどが挙げられる。下着を身に着け、鍵のない服を着て生活することは当たり前であり、それを職員も当たり前のことと捉え、本人が本人らしく生活していけるように、専門性を活かした援助を続けていくことの大切さを感じている。



施設外体験学習を通して

ヘルパー 中村美穂

毎年新人研修の一環として行われている、車椅子に乗っての施設外出。いろんな体験をしてみるといふ実習があります。車椅子に乗って生活しておられる方の気持ちを、少しでも理解するために行われています。

車椅子を介助して思っていたことは、車椅子用に作ってあるはずのスロープが長すぎたり、角度があり介助者側にとっても不便な所が多くありました。

また、歩いていたり車に乗っているとは何ともないような道路の白線や、舗装してある道路の段差、図書館の入口にある芝マツト等がとても気になりました。車椅子に乗っている人にとっても介助している人にとっても、優しい街づくりをしていかなければいけないと思いました。

公共施設である役場も、用紙を記入する台が高すぎたり、車椅子用の駐車場に普通の車が止まっていたり、公民館の身障者用トイレはあっても事務所でない

ければ電気が付けてもらえなかったりと、不都合な場面も多くありました。

車椅子でどこかへ出掛けても、トイレへ行くのにわざわざ誰かに頼んで扉を開けてもらったり、事務所まで行って電気を付けてもらっている間に漏れてしまうこともあるだろう。そうすることが面倒くさくて出掛けることが苦痛になってしまっているのではないかと思います。

図書館へ行くと本棚の高さが気になりました。手をしっかりと伸ばしても5段目位までしか届かず、本の題名は見えませんでした。本棚には「係員をお呼びください」と書いてはいるものの、静かな雰囲気図書館では呼びづらいのではないかと思います。棚にナースコールと同じ様な感じで、ボタンでもあると係員を呼びやすくなるのではないかと思います。

池田町を車椅子に乗って移動していると、すれ違う人の色々

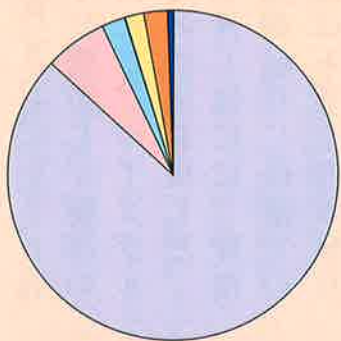
な目線がとても気になりました。車椅子を見つめ、足を見、顔を見る。その視線には、慣れないと耐えきれないと感じました。そこで、特別視していい目線とはどんな目線なのかということを考えながら、移動してみることにしました。そして、苑に向かつて進んでいると車に乗っている婦人が自然な笑顔で会釈をしてくれました。挨拶するような普通のその笑顔が、特別視などしていない目線ではないかと思いました。その笑顔のおかげで不快だった冷たい目線を

忘れることができそうでした。車椅子体験を通して、嫌な所や気になる所はたくさんあったけれど、婦人の笑顔や同じ高さの目線で見ることでできたチュートリップやタンポポに心がほっとしました。毎日車椅子に乗っている人にも、車椅子に乗ってどこかへ移動することが苦痛ではなく、楽しみを持って頂ける様になればいいと思います。今後は「楽しい外出」を目指して、この経験を土台にして介護をしていきたいと思っています。

平成十一年度施設会計決算報告

(単位:千円)

措置費収入	378,235
補助金収入	26,539
利用者負担金収入	9,847
寄付金収入	277
繰入金収入	8,000
雑収入	10,065
引当金収入	2,650
前期余剰金繰越金	0
合計	435,613



(単位:千円)

事務費支出	310,066
事業費支出	96,649
繰入金支出	28,890
引当金繰入	0
当期繰越金	8
支出合計	435,613

